様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３３３０２１０

研究課題名（和文）精神力動的心理療法家のトレーニングに関する開発的研究－国際比較調査を通して

研究課題名（英文）A developmental study on the psychodynamic psychotherapist training from a comparative perspective

研究代表者
松木　邦裕（Matsuki, Kunihiro）

京都大学・教育学研究科（研究院）・教授

研究者番号：３０１４０７６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,300,000円、（間接経費）　　2,190,000円

研究成果の概要（和文）：日本の精神力動的心理療法のトレーニングの質を高めるための具体的な方策を検討すべく，米国，ドイツ，イギリス，フランスの力動的心理療法家養成のシステムおよびその実態に関して，養成に関わる人物の招聘やシンポジウム，および研究者による現地の訪問での参与観察や資料の収集を行ない，日本におけるトレーニングの問題点を明らかにした。とりわけ日本では，スーパービジョンや実地研修の不足，事例を見立てる上での構造の不在が指摘された。そして，日本の文化的文脈等を自覚化しつつ，その改善の方向を具体的に討議し，より適切な訓練のモデルを構想した。また，見立て，臨床像記述の方法論等を検討し，実際の訓練に適用した。

研究成果の概要（英文）：With the aim to get the ideas to enhance the quality of psychodynamic psychotherapy training in Japan, the actual states of psychotherapy trainings as well as their systems in four countries (USA, UK, Germany and France) were investigated. Persons who were responsible for training in each country were invited to discuss and give advices to improve Japanese training systems. The participant-observation at the training institutes of some countries was implemented as well. Through these procedures, the problems and challenges of Japanese psychotherapy training were pointed out, such as the lack of supervision and internship. Some concrete plans for improvement was suggested with considering the Japanese cultural context. New ideas and methods for the formulation and the clinical description of cases were studied and applied to the actual training at the institute where researchers belong to.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：精神分析　セラピスト養成　心理療法　国際比較　社会･文化的背景

１．研究開始当初の背景

心理療法が一定の社会的認識を得て，そのニーズも高まった現在，その質保証がいっそう求められている。なかでも心理療法をおこなうセラピストの技能等の質に関して一定の水準を保証すべきであるという議論が，世界的に生じている。その際，心理療法の中でも，介入の効果が計量化しやすく，技能が明示化しやすい方法論を中心として，心理療法の標準化とそれに対応した評価が展開されつつある。それに比して，精神分析や深層心理学などのいわゆる精神力動的心理療法は，人格の深層からの包括的変化をめざすため，その技能は複雑で曖昧性を含み，治療期間も長期にわたり，効果の指標化や計量が困難である。また，セラピスト自身の人格的成長･成熟も必要であるため，セラピスト養成には長い時間かかり，セラピストの個別性の要因も重要であり，養成方法を標準化しにくいという点がある。これまで日本では，セラピスト養成の質を維持するため，臨床心理士養成大学院のプログラムアクレディテーション制度のほか，精神力動的心理療法に関連する団体･学会が独自に認定するセラピスト等の養成制度で，質の保証が努力されてきた。

ヨーロッパや米国においては，心理療法家の養成の基準やトレーニング制度は，日本の養成システムよりも充実したものが多く，それらから学ぶべきことは多い。諸外国の養成の制度的枠組みにしては，すでにわが国でもある程度知られてはいるが，そのトレーニングの内実が実際にはどのようになっているのか，なぜそのような制度や基準が設けられ，そのような方法でなされているのかということに関しては，これまで断片的な紹介に留まっている。しかし，精神力動的心理療法は転移や間主観という対人関係を手がかりにしつつ，その文化に固有の言語を使用して治療をおこなうゆえ，社会･文化的な文脈に対する顧慮が必要であり，さらには、セラピストの養成システムそのものも，そうした社会文化的な要因の中に位置付いている。したがって，諸外国の事例を参照する際にも，こうした側面も含めた細やかな理解が伴う必要がある。すなわち，心理療法がどのような社会文化的な制度の中に位置づけられ，そこでの治療的関係にどのような文化的要因が影響を与えているかを考慮してこそ，セラピスト養成に関しても意義ある研究がなされると考えられる。

２．研究の目的

本研究では，力動的心理療法家の養成について国際比較研究をおこなうにあたり，その制度面だけではなく，実際の教育においてどのような内実があり，参加者にどのように体験されているのか，そしてそれがどのような文化的文脈の影響を受けつつ成立しているのかといった点の解明も行なった。それを通して，日本でのあり方を包括的に検討し，セラピスト養成の質向上のための方策を提言する。具体的には，次の３つの目的を設定した。

（１）制度のみならずトレーニングの実質的内容に関して、実際の訓練場面への参加や人的交流を通し、詳細な情報を収集する。またそれを通し、日本における養成課程の特徴を整理する。

（２）セラピスト養成の社会・文化的な背景に関する検討を、各国で文献調査も交えておこない、そこで得られた知見との比較を通し、セラピスト養成に関わる日本の社会文化的背景を解明する。

（３）上記（１）（２）を踏まえ、社会的要で請に応える、日本における精神力動的心理療法家の新たなトレーニングモデルを構築し、社会に向けて発信する。

３．研究の方法

本研究では，国際比較調査のカウンターパートとして，米国ではオースティン・リッグス・センターおよびニューヨーク精神分析協会，英国では英国精神分析協会およびタビストック研究所，ドイツではフランクフルト精神分析協会，ジグムント＝フロイト研究所およびデュッセルドルフ精神分析協会，フランスではフランス精神分析的相談・治療センターおよびフロイトの大儀派を設定した。研究分担者をそれぞれの機関に派遣するとともに，各機関所属する研究者，心理療法家，精神分析家の招へい事業を展開した。

おこなわれた研究は，以下の３部に大別される。

（１）精神力動的心理療法家の養成課程におけるトレーニングの実際に関して，米国，英国，ドイツ，フランスの専門家との相互交流を通した参与観察と比較調査

①トレーニングの制度および内実に関する観察調査：研究分担者が各機関を訪問し，比較的長期にわたり滞在することで，トレーニングの全体的なカリキュラムに関する調査を行うとともに，実際にどのような事がおこなわれているかを知るために，セラピストの訓練場面（ケースカンファレンス，インテークカンファレンス，スーパービジョン等）の参与観察をおこなった。対象となったのは，フランクフルト精神分析研究所，ニューヨーク精神分析研究所，英国精神分析協会，フランス・フロイトの大儀派のトレーニングであった。

②カウンターパートの機関から，精神力動的心理療法の指導的立場にある研究者や心理療法家，精神分析家を中心に，合計７件の招聘をおこない，日本の文化的コンテクストに関して知ることを踏まえたうえで，日本のセラピスト養成に関して，参与観察も含め体験してもらい，そこでの質疑応答や評価を含めて日本のトレーニング環境の特異性とそれを取り巻く社会文化的な文脈の特徴を吟味

した。また，米国，英国，日本の心理療法家による各国のトレーニング状況を相互に報告しあい，望ましいあり方についてディスカッションをおこなう，国際シンポジウムを開催した。
③上記②に関連して，各招聘者には，セラピスト養成およびそれに関わる重要なテーマに関する講演会，研究会などをおこなってもらった。

（2）トレーニングプログラムの社会文化的および歴史的背景の分析のための文献調査およびエスノグラフィカルな調査
①調査対象国の精神力動的心理療法を取り巻く文脈，すなわち，法制度，医療制度，社会福祉制度等の制度上の位置づけ，あるいは人々のニーズ，その歴史的変遷に関して，聞き取り調査，文献・資料調査を行なった。また，養成において，理論的背景となっている文献や理論について情報を収集し分析した。
②日本の心理療法の技法や理論上の特徴を明らかにするとともに，日本の心理療法を取り巻く，文化的･思想史的影響について明らかにした。また，明治以降の，精神分析を中心とした心理精神療法の導入史を詳細に探り，現在の心理療法の方法論や特徴の成り立ちの過程や構造を明らかにした。
③現代社会の各国の共通の特徴や要請に関して整理し，精神力動的心理療法が現代においてどのような意味をもつのか，どのようなことを発信していけるのかといった点に関して，分析をおこなった。

（3）日本における新たなトレーニングモデルの構築とその発信
①本研究の途中経過や成果は，日本心理臨床学会，日本精神分析学会，国際精神分析協会大会などの諸学会での発表をおこなうほか，随時，論考を執筆し，現在のトレーニングシステムの問題，セラピスト養成の望ましいあり方等に関して，発信をおこなった。また，カウンターパートの機関での講演等をおこない，研究成果に対するフィードバックを得た。
②臨床心理士養成の大学院が集う研究集会において，各大学の養成システムに関する情報交換をおこない，望ましい養成システムのあり方に関して議論をおこなった。
③研究代表者が指導する臨床心理士のトレーニング機関において，インテーク面接，見立て等に関して，改善点を指摘し，学生を含んだワーキンググループにて，これまでの慣例となっていたインテーク報告のあり方を点検し，具体的な改善のための示唆をおこない，指針書を作成した。
④各カウンターパートに属する海外共同研究者に，研究成果に関する情報の提供をおこない，フィードバックを得，また補完的資料や情報の収集をおこなった。

4．研究成果
本研究で得られた成果は，以下の 3 部に大別される。

（1）各国および日本のトレーニングの特徴
①いずれの国おいても，力動的心理療法家の養成においては，精神分析はもちろんのこと，他の深層心理的方法論においても，セラピストの自己分析（訓練分析）が，最初に体験されるべきこととなっていた。日本の場合，これは「教育分析」ということで，初心者よりも中級者のものとして考えられていることが多い。その背景には，訓練分析が師弟関係となりやすいという日本文化の特徴が影響を与えていると考えられた。
②日本のトレーニングでは，個人スーパービジョンが圧倒的に不足していた。スーパービジョンを一度も受けたことがないまま，心理療法家として活動しているという事態も決して珍しくない。また，日本ではスーパービジョンは，同時には複数のスーパーバイザーには受けないことが標準のように言われているが，ケースごとに複数のスーパーバイザーに受けることも珍しくない。ここにも日本では，スーパーバイザーとスーパーバイジーのあいだに師弟関係的な要因が含まれていようであった。
③訓練の初期の段階から，専門家としての専門性の確立がなされるまでの時期で，それぞれセラピストの発達段階に応じたトレーニングや課題などが考えられるべきであり，そのためのセラピスト成長の理論が必要であることが分かった。また，それを保証するためには，実地で活動しながらもスーパービジョン等やカンファレンスを続けていく，卒後研修システムの構築が必須であることが指摘された。単に一定の科目や知識，技能の習得がなされることでセラピストの養成をめざす科目履修だけでの資格認定は不十分である。

（2）日本および各国の力動的心理療法を取り巻く社会・文化的背景
①それぞれの国において，力動的心理療法の社会的位置づけの歴史，保険制度等の関連，他の心理支援職との関連，来談者の社会的階層上の特徴などに応じて，理論や方法論が規定されていた。日本に理論や技法等を導入する場合は，その要因に関しても考慮をしておく必要があることが指摘された。
②日本の心理療法導入に際しては，明治期の催眠の流行，心理学の一部として精神分析がアカデミズムの内部で導入されたこと，森田療法と精神分析の葛藤に潜むテーマの根強い残存，教派神道の勃興との関連などが指摘され，そのことが現在の日本心理療法の性格の形成に影響を与えていることが指摘された。また，民間や文学の領域での精神分析的思考の導入は，無視できない影響を与えていることも指摘された。

③いずれの国においても，認知行動療法が隆盛し，また，より広範で基礎的な心理関連の資格が存在したりする状況の中で，力動的精神療法は，その存在意義や効果，独自性に関して，改めて自己説明する必要に駆られていた。現在ではその試みも少しずつ実を結び，力動的精神療法と認知行動療法の棲み分けや共存，力動的精神療法の効果に関するエビデンスの蓄積などがなされていることが分かった。

（３）日本における新たなトレーニングモデルの構築とその発信
①セラピスト自身の訓練分析は，不可欠のものであることが，改めて確認された。特に，セラピストが，普段は抑圧されて気づかない自己の欲動に関して十分に気づいておくことが，専門家としての共感につながることなどが指摘された。
②乳幼児観察，モック・スーパービジョン（スーパービジョンのロールプレイ），数回の予備面接に並行したカンファレンスなど，カリキュラムに取り入れることができる方法論に関して，示唆を得ることができた。
③見立ての重要性に関して，改めて確認された。その際，葛藤モデルと欠損モデルの使い分けとそれに伴う介入の方法の工夫，セラピストの無意識での知覚を含む理解へ開かれること，直観とその変化の意義などの，重要な知見を得ることができた。それに関連して，力動的精神療法のセッティングの工夫等に関しても，知ることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 13 件）

① 松木　邦裕、心理臨床のための精神分析史-フロイトと今日の展開、臨床心理学、査読無、11 巻、 2011、793-797
② 松木　邦裕、精神分析のスキルとは（１）、精神科、査読無、21 巻、2012、 290-295
③ 松木　邦裕、治療に有効な関係を創る、精神神経学雑誌、査読無、114 巻、2012、1297-1302
④ 松木　邦裕、心理臨床家の専門性としてのこころの理解、臨床事例研究－京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要、査読無、39 巻、2012、1-3
⑤ Yasuhiro OYAMA, The transformation of Rogerian client-centered techniques of psychotherapy in Japan : Background and implications, Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy，査読有,vol.3，2012，10-17
DOI: 10.1080/21507686.2011.637567
⑥ 大山　泰宏、スーパービジョンの諸問題、臨床事例研究－京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要、39 巻、2012、17-23
⑦ 立木　康介、対象の自殺，欠如としての私、 臨床心理事例研究－京都大大学院教育学研究科心理教育相談室紀要、査読無、38 巻、2012、24-27
⑧ 立木　康介、00 年代のラカン派、ジャック・ラカン研究、 査読無、9 巻、2012、34-51
⑨ Kunihiro Matsuki, A clinical appreciation of gleichschwebende Aufmerksamkeit, in relation to the methods of psychoanalysis, Japanese contribution to psychoanalysis，査読有，vol.4，2013，16-26
⑩ 松木　邦裕、事例論文コメント：誰と，何処で，何を－心理臨床家の仕事、大阪大学大学院人間科学研究科心理教育相談室紀要、査読無、19 巻、2013、10-21
⑪ 大山　泰宏、海外の心理臨床－ドイツ、心理臨床の広場、査読無、5 巻、2013、50
⑫ 大山　泰宏、心理臨床における導入の問題、臨床事例研究－京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要、査読無、40 巻、2013、28-32
⑬ Kousuke Tsuiki, Amour en anamorphose -L’amour courtois et l’amour fou,I, Psycanalyse，査読有，vol.29，2014，63-79

〔学会発表〕（計 11 件）

① 松木　邦裕、"Gleichschwebende Aufmerksamkeit をめぐるパーソナルな見解-精神分析家の方法と分析セッションの頻度，設定、 第 29 回日本精神分析協会年次大会、2011 年 6 月 12 日、東京
② 松木　邦裕、精神分析という方法をどう学ぶか、日本精神分析学会第 57 回大会、2011 年 11 月 18 日、 名古屋国際会議場
③ 桑原　知子、大山　泰宏、畑中　千紘、心理療法で何かおこっているのか(3)-学派による違いに着目して-、 日本心理臨床学会第 30 回大会、 2011 年 9 月 4 日、福岡国際会議場
④ Yasuhiro Oyama, Characteristics of Japanese Psychotherapy, Japanese Mentality, and the Reaction to the atomic catastrophe in Fukushima，フランクフルト精神分析研究所セミナー，2011 年 9 月 23 日，フランクフルト精神分析研究所
⑤ 立木　康介、まどろみ-エス，外の思考，大文字の他の性、東京大学文学部・人文社会系研究科シンポジウム「フロイトの時代、2011 年 11 月 05 日、東京大学
⑥ 松木　邦裕、治療に有用な関係を創る第 108 回日本精神神経学会学術総会（招待講演）、2012 年 5 月 26 日、札幌コンベンションセンター
⑦ 松木　邦裕、役立つ心理臨床家になる／育てるには、日本心理臨床学会第 31 回

秋季大会（招待講演）、2012 年 9 月 14 日、愛知学院大学

⑧ 松木　邦裕、シンポジウム「私の初回面接」、第 109 回日本精神神経学学術総会(招待講演)、2013 年 5 月 25 日、福岡国際会議場

⑨ Kunihiro Matsuki, Recent development and difficulties faced by Japanese Pscyhoanalytic Society, 34th IPA Congress (招待講演), 2013 年 8 月 4 日, Prague

⑩ Yasuhiro Oyama, The implications of Noh play for Japanese Psychotherapy, Sigmund-Freud Institute (招待講演)、2013 年 8 月 22 日、Frankfurt

⑪ 大山　泰宏、研究の進め方-どうすれば「よい」論文が書けるのか-、日本心理臨床学会第 32 回秋季大会(招待講演)、2013 年 8 月 27 日、パシフィコ横浜

〔図書〕（計 5 件）

① 松木　邦裕、不在論、創元社、2011、122

② 細澤　仁（編著）・松木　邦裕(分担執筆)、松木邦裕との対決－精神分析的対論、岩崎学術出版、2012、206

③ 立木　康介（編著）、精神分析の名著－フロイトから土居健郎まで、中公新書、2012、370

④ 松木邦裕　他、精神分析を語る、みすず書房、2013、237

⑤ 立木　康介、露出せよ，と現代文明は言う、河出書房新社、2013、301

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

○取得状況（計　０　件）

〔その他〕

心理臨床事例等，守秘義務に関わるデータを含むため，講演等の詳細な記録を DVD により心理臨床にかかわる専門家で共有した。

６．研究組織

(1)研究代表者

松木　邦裕（MATSUKI, Kunihiro）

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：３０１４０７６８

(2)研究分担者

大山　泰宏（OYAMA, Yasuhiro）

京都大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：　００２９３９３６

立木　康介（TSUIKI, Kousuke）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：７０３１４２５０

(3)連携研究者

なし